

藁しべ長者と蛇

——『今昔物語集』卷十六第28話を読む（一）——

横 田 隆 志

一 柳田國男「藁しべ長者と蜂」

柳田國男が昭和十一年（一九三六）に発表した「藁しべ長者と蜂」¹⁾は、昔話や説話の研究者の間でよく知られた論考である。その研究史上の意義は疑いを容れない。傾聴に値する指摘はもちろんある。ただ理解できない叙述も多い。例えば柳田は「所謂説話文学に限らず、歌でもことわざでもとは一切が口の文芸であり、今でもまだ三分の一はさうだ」と言うのだが、説話・歌・諺がもとはすべて口承文芸だという指摘に納得する人は今どれだけいるだろうか。「三分の一」という数字も根拠は示されず、そのまま議論が進んでいく。実証的裏付けのないこうした叙述が散見する上に、説話集間の書承関係、書承と口承との関わり、

昔話の伝播、話型分析など多様なレベルの論点が柳田の論考では交錯する。

問題は論題の「蜂」にすでに現れている。藁しべ長者の説話を収める最古の文献群は『今昔物語集』卷十六第28話・『古本説話集』下巻第58話・『宇治拾遺物語』第96話・『雑談集』卷五等、十二世紀前半から十四世紀ごく初期にかけて成立した説話集である（以下、右の四書所収の藁しべ長者説話は「藁しべ説話」と略称。また『今昔』・『古本』・『宇治』・『雑談集』と記す場合、注記しないかぎり各書所収の藁しべ説話を指す）。これらの文献に蜂は登場しない。出てくるのは蛇である。にもかかわらず、なぜ「蜂」なのか。

藁しべ長者の昔話には、いわゆる「観音祈願型」と「三

年味噌型」がある。⁽²⁾このうち後者には難題婿の話型が多く見られ、藁を千金に変えた者を婿にすると娘の親が言う場面などを描く。この難題婿のモチーフが九州の島々（壹岐島・五島列島等）や沖繩、そして東北に分布することをふまえ、柳田は言う。

虻は日本の民間説話の中には、絶対にいつてよいほど現はれて来ないのである。さうして蜂ならば我々の難題智入話に、必ず常にといふ位につきまといつてゐる。（傍線部引用者、以下同）

そして柳田は例えば山にある多数の木の本数を数えよという難題に蜂が「千三ブーン」と教えてくれた話など、近代に採集された四つの昔話を引き、このように論じる。

だから長者の智になる難事業を、蜂の援助によつて為しとげた昔話は、日本にもと流布してゐたことがわかる。（略）藁しべ一本をもとでに妻覓ぎの條件を充したといふ話と、蜂の援助によつて成功した話とが、前には結合した例もあつたことが察せられるのである。

問題の核心は、傍線部の「もと」「前」という表現にある。「もと」「前」はいつを指すのか。柳田はこれを『今昔』以前とする。

・ かの長谷寺の虻も三書に共通で、明かに筆者の潤色ではなく、語部の口に伝はつてゐたものだが、仮に意識して蜂の援助を継承したのでない迄も、少なくともその構想を暗々裡に支配してゐたものが、或小さな羽蟲の隠れたる力であつたといふことはほゞ明かである。

・ 何等の義理もないのに、尚或特定の人を助勢する動物があつたといふ話は、曾て精霊のかゝる小さな生物の形で去来することもあるやうに考へて居た、上代信仰の痕跡であつたといふ説が、無理なく斯ういふ場合にはあてはまるやうに私は思ふ。

つまり『今昔』の「虻」は、本来は特定の人を助勢する精霊としての「蜂」であり、その祖型は上代にさかのぼるというのが柳田の論の骨子である。⁽³⁾だから論題は「蜂」でなければならなかつた。しかし右の要約にすでに明らかだが、蜂の登場する難題婿譚が『今昔』をさかのぼるという論証は一切なされていない。

『今昔』の編まれた十二世紀前半にも口語りが数多く存在したことは疑いあるまい。説話の源をたどれば、つまり『今昔』や『宇治』の共通母胎以前にまで遡及するならば、その祖型は昔話に行き着くだろう。この点は今野達氏や池

上洵一氏、山口眞琴氏が言及しており、筆者もその点は賛成である。一読明らかなように本話は交換連鎖を主要なモチーフとしているのだから、その基底に昔話がある点まで柳田説を否定するわけではない。別稿を期したいが、その祖型は、山口氏が想定するような、手にした品が次第に価値ある物へと交換されていくプロセスを主とした昔話だったと考える。ただ本話の祖型は本当に上代までさかのぼるのか。その上代の口語りに蛇ではなく蜂が登場したのか。これを実証する方法は存在しない。その点は柳田もある程度は自覚していたものか、断定調の多いこの論考で、議論の核心であるはずの部分が「その構想を暗々裡に支配してゐたもの」という曖昧な表現になっている。明快に実証できるならば「暗々裡」などとは言わないだろう。

ところで柳田は「蛇は日本の民間説話の中には、絶対にいつてよいほど現はれて来ないのである。さうして蜂ならば我々の難題智入話に、必ず常にといふ位につきまゝとつてゐる」と述べていたが、日本昔話通観で調べると、難題婿譚で蛇の登場する話は、岩手・宮城・秋田・福島・群馬・新潟・島根・岡山・広島・香川の各県に分布していることがわかる。⁽⁶⁾ また廣田収氏は全国に伝わる藁しべ長者の昔

話計六十一話を一覽にまとめている。⁽⁷⁾ それによれば、蛇は十五例登場するが、蜂は現れてこない。柳田は難題婿の話型をもつ藁しべ長者の昔話で一例だけ蜂の登場する例を挙げてゐるが、それはむしろ例外的な話である。『今昔』や『雑談集』等、院政期から鎌倉時代にかけて編纂された文献資料でも登場するのは蛇であり、蜂ではない。先行研究でこの問題を追究したものは管見に入らないが、⁽⁸⁾ 説話本文にそくして議論すべき方向性はここに明らかである。

藁しべ説話において、蛇とは何だったのか。

二 『今昔物語集』の蛇

藁しべ説話のうち、成立年代が最も古いのは『今昔』所収話である。本稿では原則として『今昔』の表現を取り上げ、『古本』等の同話類話、そして全国に伝播した昔話を適宜参照しながら議論を進める。以下『今昔』で蛇の登場する場面を示す。

而ル間、蛇⁽¹⁰⁾、顔ヲ廻ニ飛ブラ、煩シケレバ木ノ枝ヲ折テ掃ヒ去レドモ、尚同ジ様ニ来バ、蛇ヲ手ヲ捕ヘテ、腰ヲ此藁筋ヲ以テ引キ括リテ持タルニ、蛇腰ヲ被括レテ飛ビ迷フ。

而ル間、京ヨリ可然しかるべキ女、車ニ乗のりテ参ル。車ノ簾すだれヲ打チ纏かつぎテ居タル児有リ。其形そのかたチ美麗也。児ノ云ク、「彼あノ男、其ノ持タル物ハ何ゾ。其レ、乞こひテ得えセヨ」ト。馬ニ乗テアル侍さふらひきたり 来テ云ク、「彼ノ男、其ノ持タル物若君ノ召スニ、奉レ」ト。男ノ云ク、「此レハ観音ノ給たまひタル物ナレドモ、此ク召セバ奉ラム」ト云テ渡タレバ、「糸哀いとレニ奉タリ」トテ、「喉のど乾かわクラム。此レ食ヨ」トテ大柑子だいかんじ三ツヲ馥かうばシキ陸奥国紙ニ裹つつみテ、車ヨリ取とラレバ、(下略)

虻と対になる藁について先にごく簡単にふれておく。長谷寺の大門で転び、無意識のうちに手に握っていた藁を見て『今昔』の青侍は「此レヲ給フ物ニテ有ニヤ」と思う。『古本』ではさらに青侍が「物はかなく」(『宇治』では「いととはかなく」) 思ったと記す。ただ長谷観音のはからいなさるわけがあるのだらうと青侍が思いなおす点では三書は共通する。

かつて佐竹昭広氏は昔話「山の神とほうき神」に見える「ワラ一本の持ち運」という言葉を参照してこの藁を「薄幸のシンボル」と捉え、この薄幸のシンボルが逆説的にはたらいたという奇跡、致富への階段を着実に登りつめた幸

運、藁しべ長者譚の標準型は必ずこの二つを骨子として成り立っていると論じた。^⑪『宝物集』巻一には現世の祈りを藁、来世の祈りを稲として、その祈りを対比的に述べる箇所がある。同書巻三には「後漢書ごかんしょには、孫晨そんしんまづしくして冬の日藁をしくなど申して侍るめる」とも記す。^⑫佐竹氏の指摘や『宝物集』の用例をふまえて筆者なりにまとめれば、藁は相対的に価値がなく、貧しさを連想させるものとなるだらうか。

青侍がその藁を拾い歩いていくと、虻が顔のまわりを飛びまわった。そこで虻を捕まえ、藁筋でくくったというのだが、そういうことは本当にできるのか。素朴な疑問だが、実はこれが話を解く鍵になる。見通しを先に示せば、それは子どもの虫遊びの延長にある行動ではないか。類話の『雑談集』に見える「ハラシベノアルヲ、虻アブノミエケルヲ、ク、リテモチアソビケリ」という表現はそれを端的に示すと考える。さらには東北の難題婿譚で、「ワラスたつあ、アブのけつつさ糸こいつけで、ブンブンとはすて遊んでだつお」(宮城県栗原郡)^⑬、「数人の子供達が虻のお尻に糸を結びブンブン飛ばして遊んでゐた」(山形)^⑭といった発端をもつ昔話がいくつか伝わっている。これも糸でくく

った蛇が遊びの対象だったことを示すであろう。こうしたことは、ある世代以上の人にとっては常識なのかもしれないが、以下資料にそって改めて見ていくこととする。

一口に蛇と言っても多くの種類がいる。世界で約四千種、日本で約百種が確認され、食性は捕食性、訪花性、吸血性など種によって異なる。^⑮ただ人間との関わりで言えば『和名類聚抄』巻八に「説文曰、蛇^⑮（略）字亦作蝱、阿夫^⑮」^⑮「蝱人飛虫也」^⑮とあるように、人あるいは動物の血を吸う印象が強い。現在一般に嫌われる動物が古典の世界で同様に忌避されたわけではないが、^⑮原則として蛇のイメージがよろしからぬことは、今も昔も変わらない。上代には雄略天皇の臂に蛇が噛みついた記事があり（『古事記』下巻・雄略天皇条、『日本書紀』雄略天皇四年八月条）、平安前期に成立した『性霊集』では「蚊蛇」という熟語で蚊とともに弱小者の比喩として用いる。^⑮『日本往生極楽記』第30話、『法華驗記』中巻第44話、下巻第88話（今昔物語集）巻十三第22話に同話）に、篤信の尼が蛇に噛まれてもはらわなかった、僧があえて蛇にわが身を施した等の記述があるが、これらは蛇のような虫にさえ慈悲の心を保ったという文脈で描かれる。「あぶぞ蚊ぞ、蜂・蟻^{アリ}などいふ

毒虫^{ドクムシ}どもが身にひしととりつい」たが文覚はいささかも身を動かさなかったという『平家物語』の著名な一節においても、文覚の堅固な道心を引き立たせる虫として蛇が登場する（巻五「文学荒行」）。ここで藁しべ説話に立ち戻れば、蛇が青侍の顔に寄って飛びまわる様子は、『今昔』では「煩シケレバ」、『古本』・『宇治』でも「うるさければ」と記される。蛇が嫌われ者として描かれていることは明らかである。

ただ一方で虫は、とりわけ田舎暮らしの子どもにとって絶好の玩具だった。蛇や蠅も例外ではない。例えば次のような民俗事例がある。

唯蛇と云ふと、馬蛇とトシ蠅の中間位の大きさのもので、人間にも稀に附着くことがある。捕へると羽根の先を、ち切つて飛べない様にすることもあるが、それよりも「眼を抜く」と称して、羽根の付け根の裏に細く二分ばかりの長さに出てゐるものを（二本）抜く。すると不思議に、視力を失うたものの、様に、盲滅法に動いて遠くへは飛んで行けなくなる。誰の気付いたことやら。^⑮

これは秋田県仙北郡角館地方に伝わる民俗や風習を記し

たものである。蛇は体長一握ほどの虫であり、もちろん飛びまわることが捕らえることは十分可能だった。それどころか、体の一部を抜き飛ばさず遊んだというのである。伝承の例であるが、宮城県に伝わる昔話「アブの報恩」では、「わらすたず（子供たち）が、アブはおしエみずげで（押え付けて）、おもっしエずぐりぬ（面白半分に）、ブツ、ブツと潰すてんだど」とあるように、子どもたちが面白半分に蛇を潰す場面がある。⁽²⁰⁾ 他の難題婿譚（蛇報恩譚）でも、男が子どもから蛇を助ける場面で「あぶおもちやにして」（福島）、「羽根をちぎられそうなあぶ」（島根）、「子供が大勢寄って一匹のあぶをつかまえて、「羽根を切つてやれ」「脚をもいでやれ」とさわぎおるそうな」（岡山）といった描写が散見する。蛇が散々にいたぶられるのは秋田県に限ったことではないようである。

では蛇を縛れるか。遺憾ながら、その実例は管見に入っていない。だが蠅ならば次の例がある。

生きた蠅を竹に結えた糸につけて飛ばせ、ヤマヘンボ（オニヤンマ）やギン（ギンヤンマ雄）・チャン（ギンヤンマ雌）を捕った。⁽²²⁾

これは熊本県上益城郡益城町に伝わる虫遊びの記録であ

る。生きた蠅を糸で縛る遊びは、かつて確かに存在した。柳田は「蛇のこしを藁でしばるとは写真でないが」と『今昔』等の叙述に難をつけていたが、実は十分写実的である。付言すれば、蛇ではなく蠅を縛るとする藁しべ長者の昔話が岩手県に伝わる。

一匹の蠅がうるさく顔にまつはりつく。捕へて之を藁でしばり更に行くと、ぶん／＼鳴いて飛廻る。やがて長者の娘の行列が向ふからやつてくるのに出会った。（藁しび長者」、岩手県双葉郡久之濱町。⁽²³⁾）

地理的に離れた熊本県の虫遊びと岩手県の昔話との間に直接的な影響関係はないだろう。にもかかわらず、生きた蠅を藁や糸で縛る点で両者は一致する。この背後には、虫遊びの長い歴史と広汎な流布が母胎として介在しているのではなからうか。

熊本事例には、実はもう一つ見逃せない点がある。引用文にあるとおり、これは蜻蛉を捕まえる遊び、いわゆる蜻蛉釣の一種を記す。注意されるのは、棒状の物に糸をつけ、糸のもう一方の端に虫をくくりつけるその形態である。これは『宇治』が伝える次の表現と一致する。

うるさくぶめきければ、とらへて腰をこの藁すぢにて

ひきく、りて、杖のさきにつけて持たりければ、腰をく、られて、ほかへはえ行かで、ぶめき飛まはりけるを、(下略)

同話である『今昔』・『古本』には木の枝で蛇を追ひ払おうとしたとあるのみで、枝に藁筋をくくりつけたかどうかは言及がない。ただそうした点をさしひいても、右の民俗事例と『宇治』の記述との一致は興味をひく。

蜻蛉釣を手がかりとして考察を重ねれば、明治期における東京には、次のような捕り方があった。これは雌の蜻蛉をおとりとして雄を捕らえる方法を記したものである。⁽²⁴⁾

蜻蛉捕り

細竿の先に糸を付し、捕えし一疋のやんま蜻蛉をその先に縛し(下略)⁽²⁵⁾

同様の捕り方は羽前にもあった。

やんま即ち山蜻蛉を捕うるには、その一疋を糸に繋ぎ、竹に結び付けて振りながら(下略)⁽²⁶⁾

これとはば重なる光景が『梁塵秘抄』に見出される。

居よゝ蜻蛉よ 堅塩参らんさて居たれ、動かで簾篠の先に馬の尾縊り合せて、搦附けて、童冠者輩に繰らせて遊ばせん(巻二第438番)

子どもの遊びの歴史は長い。近現代の子どもの遊びが平安期にさかのぼりうるのである。

こうした蜻蛉釣の情景が藁しべ長者の昔話の設定と似ていることは、岩下均氏がすでに示唆している。⁽²⁷⁾『梁塵秘抄』の記す馬の尾と蜻蛉という組み合わせは『今昔』の設定と異なるが、実は藁しべ長者伝承の中には「男が野中の石につまずいて起きてみると、馬の毛にとんぱを結んだものをつかんでいる」といったものがある(岩手県紫波郡矢巾町⁽²⁸⁾)。藁と蛇ではなく、馬の毛と蜻蛉という組み合わせであり、しかも男が起き上がった時にはその二つがすでに結びつけられていたのである。論考中に明記されていないが、岩下氏の念頭にあったのは『今昔』ではなく、こうした民間伝承だったかもしれない。

簾に使う篠竹に馬の尾をつけ、さらに蜻蛉をくくりつける。『梁塵秘抄』が記すように、それは「童冠者輩」の遊びの対象だった。子どもたちは身近にあるものを、それこそ自在に組み合わせたのである。⁽²⁹⁾とすれば古代中世社会を生きる多くの人々にとって、蛇を捕まえたり、それに何らかの手を加えたりすること自体は、さして珍しくなかったのではないだろうか。『今昔』の記す青侍の行動を子ども

の虫遊びの延長と解したのはそのためである。事実『雑談抄』は「蛇ノミエケルヲ、ク、リテモチアソビケリ」と記していた。

ただ身分の高い家の若君にとって、藁筋をくくりつけた蛇は珍しい玩具に見えたのだろう。若君は「彼ノ男、其ノ持タル物ハ何ゾ。其レ乞テ得セヨ」とねだり、結果として蛇と藁筋は柑子と引き換えられることになった。ただの藁筋では柑子にならない。それで蛇をくくり、一種の玩具としたことで、藁筋の価値は上がった。その何気ない行為が起点になって、青侍の運命はにわかには好転し始めたのである。嫌われ者の蛇こそが青侍にとって、また話の展開にとっても大事な役割を果たしていることは疑う余地がない。

藁しべ説話の蛇には、子どもの虫遊びという、柳田の指摘とは違う意味での民俗学的背景があったのではないだろうか。その蛇は『今昔』の本文に「顔ヲ廻ニ飛ブラ、煩シケレバ」とあるとおり、あくまで嫌われ者である。そうでありながらも、遊びとしてくくられて藁筋の価値を上げ、結果として長谷観音の夢告を実現に導く虫、それが藁しべ説話にとっての蛇だと筆者は考える。

したがってこれを蜂に変え、さらにそれを上代の精霊信

仰にさかのぼらせる必要はない。そもそも人を助勢する精霊としての蜂の例話として、蛇の登場する藁しべ説話を取り上げること自体に無理がある。柳田が参照した蜂はすべて「千三ブーン」などと言って難題の答えを教える存在であり、言わば擬人化されている。しかし『今昔』の蛇にそうした側面はない。あくまで虫である。しかも『今昔』には難題婚譚に頻出する報恩という要素がなく、話型的にも隔たりがある。今後柳田説を踏襲するのであれば、蛇から蜂への変換、上代への遡及という論点に加え、擬人化や報恩という要素の有無といった質的差違をどう扱うかという問題も実証的に論じることが求められるであろう。

三 藁しべ長者と長谷観音

本稿では柳田説を批判することにはなつたが、もちろんそれが目的なのではない。筆者はこれまで長谷観音の霊験説話の研究を続けてきた。藁しべ説話は、その長谷観音が利益を施した話としてよく知られている。したがって筆者の関心は、この話と長谷観音の霊験譚との関わりをどう捉えるかを探る点にある。その基礎作業として『今昔』を読むところから始めたわけだが、多くの先行研究があるに

もかわらず、『今昔』の本文を精緻に読み込んだ研究は案外少ない。蛇一つ取り上げて、理解を深めるべき論点や関連資料があることはすでに示したとおりである。

本稿で取り上げなかった場面はどう読めるのか。本話と長谷信仰との関わりはどう理解できるか。今後の課題は明らかである。稿を改めて論じたい。なお蛇をくくった藁と引き換えに青侍が手に入れた大柑子については、『大阪大谷大学紀要』第54号（令和二年二月）で詳論した。あわせて御参照いただければ幸いである。

※注に記したもののほか、引用・参照したテキストは以下のとおり。『日本書紀』・『性霊集』は日本古典文学大系、『古事記』は新編日本古典文学全集、『今昔物語集』・『梁塵秘抄』・『古本説話集』・『宇治拾遺物語』・『平家物語』は新日本古典文学大系、『雑談集』は中世の文学、『日本往生極楽記』・『法華験記』は日本思想大系『往生伝 法華験記』、『一遍聖絵』は日本絵巻大成、『河内名所図会』は『河内名所図会』（版本地誌大系、臨川書店、平7）。諸資料の引用にあたっては原則として通行の字体にしたがい、適宜句読点を施した。なお読みやすさを考慮しルビを一部省略した箇所がある。□は原本の欠字・欠文等、（ ）は割注・小字等、（ ）は筆者による注記を指す。

注

(1) 『定本柳田國男集 第六卷』（筑摩書房、昭38）所収。本稿における柳田説の引用はすべてこの論考による。

(2) 「観音祈願型」は観音菩薩のお告げを受けて藁しべを拾い、それを蜜柑・反物・馬・田畑と順に取り換えて大金持ちになる話。「三年味噌型」は親からもらった藁しべを食物を包む木の葉・三年味噌・名刀と取り換え豊かになる話。『日本昔話集成』以後の採集により、前者が十三例、後者が四十四例、計五十七例が報告されている（以上『日本昔話事典』（弘文堂、昭52）所収「藁しべ長者」の項より取意）。ただし廣田収氏の作成した一覧によれば、採集数は計六十一話となっている。同氏「長谷寺參籠男、預利生「事」考」（『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院、平15）参照。

(3) 柳田は論考の他の箇所でも「幾分でもその今昔以前の存在が窺はれるのである」、「何か今一つ前の共同の意外なものがあったのである」と繰り返している。『今昔』以前の口承文芸の復元に柳田の意図があったことは明らかであろう。その意味において、論題はやはり「蜂」である必要があったと思われる。

(4) 池上洵一氏「説話集と口承説話」（池上洵一著作集 第一卷 今昔物語集の研究』和泉書院、平13、初出昭51）

(5) 今野達氏「新注今昔物語集選」（大修館書店、昭44、補注18・19）、注（4）前掲池上氏論文、山口眞琴氏「葛藤

する観音靈驗譚―「藁しべ長者」説話攷―」（『言語表現研究』17、平13・3）

（6） 日本昔話通観の巻号と話番号は以下のとおり。3―106、4―15（類話1、2、5も）、5―41（類話2、4）、7―37（類話1―5も）、8―89、10―46（類話11）、18―42（類話1―4）、19―33（類話2も）、20―44（類話1も）、21―17（類話1）。宮城県（第四巻、計4例）、福島県（第七巻、計6例）、鳥根県（第十八巻、計4例）で採集例が比較的多い。加えて第二節で紹介する山形県の例（注14）、大谷女子大学説話文学研究会『愛媛県北宇和郡広見町昔話集』（昭和49）115番「蜂の援助」に紹介される愛媛県の例があり（関敬吾氏『日本昔話大成 第二巻 本格昔話一』角川書店、昭和53、317頁に梗概が載る）、さらには鳥取県にも昔話が伝わる（昭和五十四年鳥取県智頭町波多で採集された「亀とアブの報恩」。次のURLに本文と音声データあり。https://www.pref.tottori.lg.jp/269500.htm）。

一例のみ本文を示せば、岡山県に伝わる昔話「あぶ婿」では、村中の娘の中から庄屋の娘だと思ふ者に酌をさせよという難題が出された時、蛇が恩返しのために次のように登場する。

どうしようかしらん思ふようたら、障子の棧へあぶがと
まって、

しゃーくーさーせーブンブンブン
しゃーくーさーせーブンブンブン

いうのが聞えたそうな。ちようどその時、自分の前へ来た娘に酌うさせたそうな。せえて旅人は、とうとう庄屋の婿になったそうな。

※引用は稲田浩二氏『なんと昔があつたげな 上巻』（岡山民話の会、昭和39、152頁）による。伝承者は大正九年生まれの大森かつ子。

稲田浩二氏『日本昔話通観 第28巻 昔話タイプ・インデックス』（同朋舎、昭和63）252番に「難題婿―蜂の援助」というタイプが立項されている。このことが端的に示すように、難題婿の話型をもつ昔話で男を援助するのは原則として蜂である。したがって、いくら蛇が登場する昔話があるとは言え、蜂の亜型であることには変わりないだろう。「ブンブンブン」という羽音も一致することから、この蛇に蜂の姿が影響している、だから『今昔』の蛇も祖型は蜂なのだという反論はありうる。しかし柳田論では、難題婿譚で男を助勢するのは蜂である、蛇は現れないという見通しが立論の前提となっている。したがって多くの伝承で蛇が登場する事実は柳田の論旨に抵触するのであり、まずその点で修正を要する。また本論で考察するように、『今昔』等の藁しべ説話では蛇の報恩や擬人化といった要素がなく、右に示した伝承とは明らかに質的差違がある。柳田の仮説を証明するためには、いくつもの課題を実証的に乗り越える必要があるのである。

（7） 注（2）前掲廣田氏論文。

(8) 佐々木喜善『聴耳草紙』(筑摩書房、昭39、初出昭6) 19番「蜂のおかげ」。岩手県胆沢郡水沢町に伝わる。ただ柳田が認めるとおり、これは「東北にたつた一つ」伝わっているだけの話である。佐々木は遠野の話を柳田に聞かせたことでよく知られる人物だが、「蜂のおかげ」はその佐々木が採集した話であるから、時代がどこまでさかのぼるかはもちろん明らかではない。

(9) 藁しべ説話を論じるにあたり、特に参照した論考(柳田以降のもの)を掲げる。有名な話だけあつて、この説話については昔話との比較、説話と口承文芸との交渉、勧進聖の関与、注釈、海外に分布する同型話との対照、長者となる男の人物造型、話の構成要素(例えば馬)への着目等、さまざまな観点から言及がなされてきた。辞典類の解説、『今昔』等の注釈書も種々あり、さらには本話を素材として別の主題を論じるものも見受けられる(例えば稲田利徳氏「三つなりの橘」考)『人が走るとき 古典のなかの日本人と言葉』笠間書院、平22、初出平18)。

したがって以下では、すべての論考を網羅的に記したわけではない点、御海谷いただきたい。ここに挙がっていない先行研究については、各論考の注などを御参照いただければ幸いである。

永井義憲氏「勧進聖と説話集―長谷寺観音験記の成立―」(『日本仏教文学研究 第一集(改訂版)』豊島書房、昭41、初出昭28)、佐竹昭広氏「下剋上の文学―民話のク

ツチャネたち―」(『下剋上の文学』筑摩書房、昭42)、注(5) 前掲今野氏解説(昭44)、佐竹氏「藁しべ長者のこ」と(『民話の思想』平凡社、昭48)、山内洋一郎氏「物語体説話文学の語彙」(『日本の説話 第7巻 言葉と表現』東京美術、昭49)、中村誠氏「雑談集」と昔話」(『日本昔話研究集成5 昔話と文学』名著出版、昭59、初出昭49)、福田晃氏「藁しべ長者」と因果思想」(『昔話の伝播』弘文堂、昭51、初出昭50)、注(4) 前掲池上氏論文(初出昭51)、高橋貢氏「『今昔物語集』所収の藁しべ長者譚(卷十六第二十八話)をめぐって」(『専修国文』46、平2・2)、山本則之氏「藁しべ長者」(『昔話・伝説必携』學燈社、平3)、中村修也氏「わらしべ長者と古代交易」(『史潮』新41、平9・5)、中込重明氏「拾い物立身譚―藁しべ長者から塩原多助へ―」(『日本文学誌要』60、平11・7)、注(5) 前掲山口氏論文(平13・3)、渡辺麻里子氏「ご利益の仏、救いの仏―わらしべ長者―を読もう」(『宇治拾遺物語』第九六話)、『月刊国語教育』251、平13・11)、高岡幸一氏「藁しべ長者譚」の説話的技法」(『言語文化研究』28、平14・2)、渡辺匡一氏「大黒舞」(『お伽草子事典』東京堂出版、平14)、注(2) 前掲廣田氏論文(平15)、新間水緒氏「古本説話集下巻 本文と注釈―第五十八話 長谷寺参詣男以靈替大柑子事―」(『花園大学国文学論究』34、平18・12)、飯島裕三氏「初瀬(長谷)寺観音信仰より探る―『源氏物語』から「藁しべ長者」伝説へ

の道程」(『学習院高等科紀要』5、平19・7)、金恩愛氏「韓国昔話「藁縄一本で長者になる」型の研究—日本昔話「藁しべ長者」型との比較をめぐって—」(『文化学年報(同志社大学)』63、平26・3)、千本英史氏「藁しべ長者」と「かはら」(『奈良人権部落解放研究所紀要』36、平30・3)。

管見のかぎり、藁しべ説話の同話類話につき昔話を含めて最も包括的にまとめるのは、稲田浩二氏『日本昔話通観研究篇2 日本昔話と古典』(同朋舎、平10) 96番「藁しべ長者」、同『研究篇1 日本昔話とモンゴロイド—昔話の比較記述』(同朋舎、平5) 96番「藁しべ長者」。後者では「だんだんよくなる取り引き」という核心モチーフをもつアジア・モンゴロイドの昔話を収集する。日本昔話通観の一覧には挙げられていないが、前掲中村氏論考は、『日本書紀』垂仁天皇二年条の阿羅斯等の伝承(所有していた黄牛が、郡内の神たる石・童女・日本の神へと次々に変わっていく)を類例として紹介する。西欧については、小沢俊夫氏『世界の民話25 解説編』(ぎょうせい、昭53)巻末86頁に「わらしべ長者」が立項され、アルバニア等の関連話が紹介されている。

(10) 引用は新日本古典文学大系によるが、そこで翻字された底本(東京大学文学部国語研究室蔵本)の字は今昔文字鏡にも存在しない字である。異体字と判断し、本稿では「虻」の表記で統一する。

(11) 注(9) 前掲佐竹氏「下廻上の文学—民話のクッチャネたち—」参照。

(12) 新日本古典文学大系『宝物集 閑居友 比良山古人霊託』21・137頁参照。なお孫晨の故事の出典は『後漢書』ではなく『蒙求』「孫晨蒙席」か(新大系137頁 注(18)・(19))。また現世の藁、来世の稲という比喻については坂卷理恵子氏「現世をいのるものは藁をこふがごとし……稲稈経と蘇婆呼童子請問経」(『宝物集研究』1、平8・5)が出典を考証する。

(13) 引用は日本昔話通観『宮城』15番「難題婿—虻援助婿」による。

(14) 引用は河北新報社『東北の昔ばなし』(河北新報社出版部、昭18) 35頁による。

(15) 伊藤哲朗氏『危険・有毒生物』(学研教育出版、平15) 97頁。

(16) 引用は馬淵和夫氏『和名類聚抄古写本声点本本文および索引』(風間書房、昭48) 所収伊勢十卷本による。

(17) このことは筆者も論じたことがある。拙稿『今昔物語集』の蜘蛛」(『鳥獣虫魚の文学史—日本古典の自然観3 虫の巻』三弥井書店、平24) 参照。

(18) 『性霊集』巻四「為人求官啓一首」、巻九「大僧都空海嬰疾上表辞職奉状 淳和天皇」「奉造東寺塔材木曳運動進表一首」。これが弱小者の比喻であることは、小町谷照彦氏「蚊」(『古典文学動物誌』學燈社、平6)が指摘する。な

お『性霊集』における「蚊虻」の用例の一つに、蚊や虻も鳳凰のような大鳥にいたら空高くどこまでも飛べるという表現があり（巻四「為人求官啓一首」、同じ修辭が安樂寺本『北野天神縁起』（統群書類従・三下613頁下段）、『一遍聖絵』巻三十段、『雑談集』巻一第1話「自力他力事」（中世の文学、45頁）、『神道集』巻九「北野天神事」（神道大系『神道集』257頁）に所見。こうした用例も、虻のイメージを知る上で示唆を与える。

(19) 武藤鐵城「虻」（『羽後角館地方に於ける鳥蟲草木の民俗學的資料』アチツク・ミューゼウム、昭10、110頁）参照。

(20) 佐々木徳夫氏『夢買い長者―宮城の昔話―』（桜楓社、昭47）109頁。この後、男は助けた虻の援助で難題を解き、立派な屋敷の婿になる。

(21) 引用は日本昔話通観『福島』37番「難題婿―蜂の援助」、同『島根』42番「難題婿―動物援助婿」（類話1）、同『岡山』33番「難題婿―動物援助婿」による。付言すれば、注（6）で紹介した鳥取県の昔話「亀とアブの報恩」では、子どもたちは虻の尻に棒を刺しておもしろがっていたという。

(22) 斎藤慎一郎氏「藤よし子さんが語る益城の虫民俗」（『虫と遊ぶ 虫の方言誌』大修館書店、平8）261頁。虻を生け捕りにする点については、斎藤たま氏「虻」（『野にあそぶ』平凡社、昭49、158頁）に、臍をむき出しにして唾を塗り、そこに寄ってきた虻を木綿糸で巻き込む方法が紹介さ

れている。また尾崎一雄の短編小説「虫のいろいろ」（昭和二十三年発表）には手で虻を捕まえる場面がある（『尾崎一雄全集 第三巻』筑摩書房、昭57）。

(23) 引用は柳田國男『磐城昔話集』（三省堂、昭17）31頁による。

(24) 植村好延氏「トンボを釣った頃」（『虫の日本史』新人物往来社、平2）参照。植村氏によれば、蜻蛉釣には素手で捕る、網やとりもち竿で捕る、雌をおとりに使って捕る、「プリ」や「とりこ」というおもりと糸を組み合わせた道具で捕るなど、いくつかの方法があった。本論で紹介した虻で捕る方法は、蜻蛉の雌を使う捕り方を応用したものである。

(25) 大田才次郎『日本兒童遊戲集』（東洋文庫122、平凡社、昭43、初出明34）17頁。

(26) 注（25）大田前掲書232頁。なお享和元年（一八〇一）刊『河内名所図会』巻五「名産高安木綿」には、こうした遊びの情景が描かれている。

(27) 岩下均氏「蜻蛉」考（『虫曼荼羅 古典に見る日本人の心象』春風社、平16）。氏は「梁塵秘抄」を引き「これは「藁しべ長者伝説」のように、スダレの材料である篠竹（しのたけ）に馬の尾を縫りあわせ、そこにトンボを結びつけて飛ばすという遊びが、子どもや若者たちのあいだで、平安時代に流行していたことを示している」と述べる。

(28) 引用は日本昔話通観『岩手』295番「わらしべ長者」によ

る。

(29) 蜻蛉のしっぽを切つてミゴワラ(穂のところに細い藁)をさして飛ばす遊びもあつたらしい。茨城民俗学会「トンボとり」(『子どもの歳時と遊び』第一法規出版、昭45、51頁)参照。

(本学日本語日本文学科教授)